



矢作川流域の大遺跡

古井遺跡群の姿が明らかに！

文化財課では、弥生時代から古墳時代にかけての西三河の拠点集落である古井遺跡群の調査を平成8年度から行っています。

これまでの調査で膨大な量の土器や木製品が出土し、古井遺跡群の実体が次第に明らかになりつつあります。ここでは、昨年度の調査成果を中心に紹介します。



◀古井遺跡群の位置

古井遺跡群って何？

古井遺跡群とは、古井町と桜井町の鹿乗川流域の水田を中心に南北約2kmにかけて広がる遺跡の総称です。弥生時代中期に始まり戦国時代に至るまで、人の活動した跡が確認されています。

何が見つかったの？

弥生時代から中世に至る住居跡やムラを取り囲む溝、人を埋葬した墓などの、人々の生活の跡が見つっています。

昨年度の調査では、弥生時代中期から鎌倉時代までの遺構と遺物を確認することができました。

どんなことが分かるの？

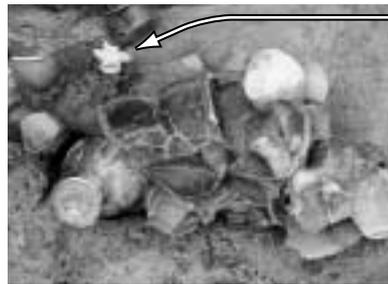
これまで、弥生時代の大集落として知られてきましたが、今回の調査を通じて、弥生時代だけではなく、古墳時代から中世に至るまで西三河を代表する巨大な遺跡であることが判明しつつあります。過去の調査では、近畿地方や北陸地方などの他地域の土器が大変多く確認されており、この地が交流の拠点であったことが分かっています。また、三河で3番目の大きさを誇る二子古墳の存在と、祭祀に使用された土器や木製品が多数出土することなども、古井遺跡群が非常に重要な遺跡であることを物語っています。

現在、歴史博物館で出土した大量の土器などの整理を進めています。完全に整理ができるまでに数年間かかるほどの膨大な量ですが、これらを分析することによってさらにたくさんのことが判明し、古井遺跡群の姿が明らかとなってくるでしょう。

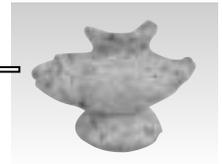
弥生時代

平成10年度の調査では、ムラを取り囲む溝が数本確認でき、大量の土器と木製品も出土しました。

平成12年度の調査でも溝が確認され、つぼ・かめなどの実用的な土器のほかに、鳥形のミニチュア土器が出土しました。左側の欠けている方が頭部で、右側が尾になります。胴部は中空で、液体を入れることができるようになっています。何かのお祭りの時に使われたのでしょうか。



▲弥生時代の溝



▲鳥形土器
(横幅 8 cm)

古墳時代

たてあな
竪穴住居が2軒見つかりました。1軒は中央に炉があり、もう1軒は北壁にかまどがあります。炉を囲む生活と、かまどを用いた生活という、古墳時代の生活スタイルを比較できる面白い発見になりました。

写真の住居は、北壁にかまどがあり、中から鍋を支えるために用いられた土器が据えられた状態で見つかりました。

また、大きくて深い穴（直径約2m、深さ約2m）が見つかりました。穴の底からは、ほぼ完全な状態で土器が7点出土しています。1500年前の井戸ではないかと考えています。



▲かまどを持つ竪穴住居



▲井戸



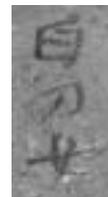
井戸から見つかった土器

奈良・平安時代

奈良・平安時代の溝からは、須恵器とよばれる土器がいくつか出土し、そのうちの7点は墨で文字が書かれました。このような土器は墨書土器と呼ばれています。判読できる文字には「白刀女、神、柿、足」がありました。このうち、白刀女は女性の名前と考えられます。この溝からは、このような墨書土器だけではなく、特殊な形の木製品も出土し、この付近で祭祀が行われていたことがうかがえます。



◀墨書土器



◀白刀女



◀神



◀柿

鎌倉時代

やまぢゃわん
山茶碗とよばれる、鎌倉時代に使われていた土器が埋められていた穴が見つかりました。この時代まで遺跡が続いていたことがわかります。



▲山茶碗



▲山茶碗が出た穴

発掘調査を行うことによって、昔の人々がどのようにして生活していたのか、また、安城が他地域とどのように結びつき、発展してきたのかを明らかにすることができます。こうした先人の歩みのうえに現在のわたしたちがあることを思うと、このような過去を知る資料は、わたしたち自身を考え、今後の

指針を定める際のヒントになるでしょう。

今年度も引き続き発掘調査を行います。様々な方法で情報提供をしていくつもりです。皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

問い合わせ▶文化財課（歴史博物館内／☎(77)6655)